想定外とは事故や災害などの報道でしばしば耳にする言葉ですが，安全性に関する議論をするときに，この“想定”ほど難しい問題はありません。想定が甘ければ安全性は低くなってしまいますし，想定が厳しすぎれば実用面において非現実的なものとなってしまうおそれがあります。想定に求められるレベルは時代や情勢などによってさまざまに変化するものと思いますが，研究者としては，種々の可能性を考慮してできる限り厳しく想定するとともに，実用性・実現可能性に関する検討もあわせて行っていく姿勢が重要であると考えます。

本特集では，「さらに安全な鉄道をめざして」と題して，乗り上がり脱線の発生確率を極力小さくすることのできる，新たな台車構造について紹介するとともに，地震時や衝突時などの特異な事象が起きた場合にも，脱線を防ぎ乗客の被害を低減するための取り組みなどを紹介しました。安全性の追究に終わりはありません。さらにさらなる安全な鉄道をめざして，日夜，研究開発に励んでいきたいと思います。

さて，来月号の特集は「大型低騒音風洞20周年」です。9月号の「鉄道技術推進センター20周年」に続き，大型低騒音風洞も今年20周年を迎えます。世界に類のない低騒音性能，国内の大型低騒音風洞として最高の風速性能などを誇るこの風洞の20年を振り返るとともに，最近の活用例，今後の展望などについて紹介します。どうぞご期待ください。（Y.H.）